「確かな読みの力」を育てる国語科授業の在り方

―児童の「問い」と「読み方」をつなぐ単元デザインの工夫を通して―

天栄村立湯本小学校　福島県教育センター　長期研究員　星　克明

1　研究の趣旨

本研究では、児童が学習の中で自ら「読み方」※1を習得し活用できるようにすることで、「目的をもって文章を読み、読み取った情報から自分の考えを形成する力」とした「確かな読みの力」を高めたいと考えた。第一年次研究では、文学的文章の学習において、児童の「問い」※2でデザインする単元構想を工夫した。それにより、他作品でも汎用的に使える「読み方」を習得したり、「問い」の質が高まることで、よりよい作品理解につながったりすることが明らかとなった。そこで、第二年次研究では、令和３年度全国学力・学習状況調査国語科「読むこと」領域における本県の課題を踏まえ、説明的文章の学習において、児童自ら「問い」をつくり、それらを精選、解決、価値付けることで「読み方」を習得し、他作品で活用する、児童の「問い」と「読み方」をつなぐ単元デザインの工夫を通して、「目的に応じて文章から必要な情報を読み取る力」に焦点化した「確かな読みの力」を高めることを目指す。

※１　本研究では、「読み方」を「児童が作品をよりよく読むための方略」と捉えて実践する。
※２　本研究では、「問い」を「児童が作品を読んだ際に感じる疑問や不思議」とする。

「読むこと」領域において、児童の「問い」と「読み方」をつなぐ単元デザインの工夫を通して、以下の手立てを講じることにより、児童一人一人に「確かな読みの力」を育成することができるだろう。

【手立て１】課題を自分事として捉えさせるための「問い」の精選活動
【手立て２】「読み方」につなげるための「問い」の価値付け
【手立て３】「読み方」の有用性を実感させるための活用場面の設定

2　研究の概要

(1)　【手立て１】課題を自分事として捉えさせるための「問い」の精選活動

初読の段階で児童が自由に「一人一人の問い」をつくり、それらを分類、整理、関連付けて、学級全体で考える学習課題「みんなの問い」へと精選する。そうすることで、児童が自分事として課題を捉え、解決に向かうことができるようにする。

(2)　【手立て２】「読み方」につなげるための「問い」の価値付け

「一人一人の問い」や精選した「みんなの問い」が、説明文の「読み方」につながることを、児童の言葉で価値付ける場を設定する。そうすることで、児童が他作品を読む際、効果的に「読み方」を活用し、作品をよりよく理解できるようにする。

(3)　【手立て３】「読み方」の有用性を実感させるための活用場面の設定

教科書教材で学んだ「読み方」を他作品で使って、解説書や作品ガイド等を作成する言語活動を設定する。そうすることで、学んだ「読み方」の有用性を実感させ、目的に応じて使うことができるようにする。

3　成果と今後の課題

(1) 研究の成果

○　児童自らつくる「問い」から、有用性を実感できる「読み方」を、児童自ら引き出す単元デザインの可能性を示すことができた。

○　児童が「問い」から「読み方」を引き出し、その「読み方」を活用しながら構造化や価値付けを繰り返すことで、児童自らつくった「問い」の価値や有効性の実感につなげることができた。

(2) 今後の課題

○　新たな説明文の要旨文作成の際、「読み方」を十分に活用できていない児童が見られた。どの児童にとっても、有用性を実感しながら活用できる「読み方」にするために、叙述と「読み方」となる「よりよい問いの条件」を、丁寧に結び付ける場の確保と工夫を講じていきたい。